



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大学と哲学
Author(s)	藤本, 忠
Citation	哲学, 53, 61-79
Issue Date	2019-01-04
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75563
Type	departmental bulletin paper
File Information	53_t5.pdf



大学の中の哲学

藤 本 忠

1 はじめに

一般に人文系の研究者（とりわけ、哲・史・文といわれる人文知を担う学者）にとっては、その研究の指標とされる業績に著作のあるなしが挙げられることが多い。これに対してそれ以外の諸科学（とりわけ理工系の研究者）の研究者に求められるのは、査読付きの論文数の数やインパクトファクターの高い雑誌への掲載数である。哲学の世界でも、最近では、自然主義のブームのためか、理科系的な発想に基づく業績が求められることが多くなっており、教育現場でも、「社会的有用性」や「産業との連携」が、教育ポリシーとして大学現場を覆っている。小方直幸は若年層の雇用問題が与えてきた大学の職業準備教育の系譜を、「自己責任性教育」の揺らぎ、「学問教育という原則」の揺らぎ、の観点から明らかにしているが、そもそも現在の大学教育の伏線は、1980年代の中曽根内閣時の教育改革推進と、その末路としての1991年2月の「大学設置基準の大綱化」による一般教育と専門教育の科目区分の廃止、1980年代後半から最近まで続いた大学入学者数の増加と、大学の増加にある。現在、18歳人口の減少といういわゆる2018年問題を迎え、大学の大衆化と大学の研究をめぐる環境や業績のあり方は、哲学系の分野においては、ますます厳しさが増すだろう。

人文知を担う哲学のような分野で、本の出版（教科書や啓蒙書ではない研究書）がこれまで重視されてきた背景に

は、野家啓一が人文学の歴史的過程を敷衍しながら論じているように、古典ギリシアを範とした人間性の探求のための学問が、その本性上、文献学へと傾斜せざるを得ず、大学の紀要論文などの非査読論文が、本を出版するための準備として機能してきたからである。そこには、社会的有用性と無縁な自由学芸（教養教育）と最初から産業との関係を考慮に入れざるを得ない機械知（技術学）との対立という構図がみてとれる。³⁾我々は、矢継ぎ早に出される文部科学省からの方針や法令に右往左往しつつも、大学の起源と人文知、とりわけ哲学の大学における位置を、その都度見直す必要がある。日本哲学会や日本倫理学会などでも、これまでシンポジウムやワークショップを通じて、こうした問題は幾度も議論されてきた。本論はこうした議論を踏まえつつ、大学の起源から問題を掘り起こし、現代の大学論からみてむしろ目新しく映るカントの学問論やドイツ観念論の学問論を考慮しつつ、大学と哲学のあり方について考えていきたい。

2 カントの大学論

1798年にケーニヒスベルクにおいて出版された『諸学部争い―三部からなる』は、周知のように、カントが中世以来の伝統的学部区分に立って、上級学部である「神学部」、「法学部」、「医学部」と下級学部である「哲学部」との間の諸問題を、哲学が純粋理性の学問であるという観点から論じた著作である。この著作の古典としての重要性は疑い得ないが、背景についての紹介は多いとはいえない。そこでここでは、この著作に関する背景を探ってみたい。

哲学部はいわゆる教養諸学科の学部であるが、ここでは伝統的な7つの自由学芸（リベラル・アーツ）を含む学部を指す。カントは、ケーニヒスベルク大学を念頭に置いて、哲学部の意味とその重要性を論じる。その前提として、ケーニヒスベルク大学が16世紀半ばにマールブルク大学に次いで設立された、比較的新しいプロテスタント系の大学

であつたことを念頭に置いておく必要がある。

H・ラシュドールの整理によれば、神聖ローマ帝国国内において最も古い大学は、14世紀に設立されたブラハ大学やウィーン大学であり、現在のドイツ内において最も古い大学は、エルフルト大学、ハイデルベルク大学、ケルン大学である。15世紀には、ライプチヒやフライブルク、マインツに大学が置かれるが、これらに比べてもケーニヒスベルク大学は比較的新しい。世界で最も古い大学である、パリ大学やオックスフォード大学、サレルノ大学、ボローニヤ大学は12世紀にまで遡るが、例えば、パリ大学では、最初から教養諸学の教師が極めて多かったため、教養学部の場合（ギルド）の勢力が圧倒的であり、教養学部の学部長が大学の学長を兼務することが普通であつた。⁽⁵⁾逆に、ドイツでは、パリなどと違い、教養学部、哲学部が上級3学部と対等の発言権を持つのに数世紀が要された。それゆえ、カントの大学論は歴史的にみれば、ドイツの、それも比較的新しい大学で生じていた問題を背景にしていることができる。

もう一点、カントの大学論を考えるにあたって重要なことは、ドイツ特有の学部制度であり、その学部の運営と世俗社会との関係である。ドイツでの学部制度は、先のパリ大学やボローニヤ大学のような古い大学とは異なる特徴を備えていたとされる。ボローニヤ大学、パリ大学、オックスフォード大学は、既存の小さな学校から自然発生的な発展により大学となつた。それは、大学で学ぶ側の要請や教える側の要求に応える形で発展したのであり、大学（universitas）⁽⁷⁾が、知的ギルドとして成立した歴史そのものである。したがって、大学の運営も、教会（ローマ教会）のお墨付きが必要であつたにせよ、世俗権力と教会権力の間のバランスの中で自主的になされていったとみるべきであろう。ところが、ドイツ型の大学は、その多くが、学部（Fakultät）という概念枠組みにおける正教授および非正教授代表を加えた仲間を意味しており、学ぶ者と教授する者とともに含むという意味で捉えられていない。⁽⁸⁾つまり、正教授を中心とした教師集団を学部と理解していた。また、ドイツの場合、大学が国王や都市によって設立され維持され

ており、そのお墨付きが、教会権力と世俗権力両方から必要とされていた。このため、学部は自然発生的に自由な知的手段として構成されていったというよりも、制度として最初から学部が作られ、組織上硬直化していったとみられている⁹。各学部においては正教授の権力は、人事権や学位審査権、学生の懲戒権や、学部長の被選挙権にまでわたり絶大であるが、他の講座や学部に対しては対等性の原理が守られ、これがため、下級学部とみなされた哲学部は、上級学部に対して対等性を維持するため不断に努力したのである。

カントが『諸学部の争い』『序論』で、大学を学者共同体と呼び、下級の学校から生徒を入学させる権利を、学部を介して行う、という背景には、¹⁰ドイツ的学部組織の特徴があつたとみるべきであろう。カントは上級学部を「教説がどのような性質のものであるべきか、あるいは公に講述されるべきか、ということが、政府自身の関心を引く学部であるのにたいして、学問の利害関心だけに配慮すればよい学部は、学説をみずからが適当と認めるとおりに述べてかまわないというので、下級学部と呼ばれる」¹¹、といささか自虐的ない方をしているが、それは、裏返せば、上級学部が政府によつて「裁可された」教説を論じる学部であつて、哲学部の教説は学識ある国民の理性にゆだねられるということでもある。つまり、上級学部は、政府との関係の上で、民衆統治のために成立する領域を扱うということである。実際、政府は教会教区を通じて、官僚組織を通じて、福祉政策を通じて、人民を統治したのであるから、カントの指摘はドイツの大学の組織や設立の方針が、パリ大学のような最古の大学をモデルにしつつも、いかに異なっていたかを理解する上でも興味深い。この点は、後で触れるが、日本の旧帝国大学の設立方針と極めてよく似ている。

カントは、哲学部を理性の学部と規定している。「聖書神学者（上級学部）に所属する者としての」はその教説を理性からではなくて聖書から、法学者はその教説を自然法からではなくて国法から、医学者は公衆に施される治療法を、人体の自然学ではなくて医療法規から汲みとるのである。」（傍点はカントによる強調¹²）。半ば強引な区別ともいえるため、例えば、医学部への論争においては、自然治癒や生活習慣に関するカントの定義が、いささか非科学的に映つ

てしまうことは否めないが、カントの趣旨は、先に述べたように、上級学部の知の営みが、知識そのものの拡張のためになされることがなく、既存のマニユアルを運用しているに過ぎないということを明かにし、哲学部の権利と自由を上級学部に認めさせる、という点にある。また、最近明らかにされた『諸学部の争い』『準備草稿』の中で、カントは、経験的要素の多い上級学部が哲学部の評判を落とそうと努めており、融和に努めるべきは、むしろ上級学部であることを論じており、哲学だけが権力から自由であって、哲学部の支えがなければ上級学部は長続きしないことを強調している。⁽¹³⁾ こうした点をみれば、現在、我々が実学とみなしている諸学の背後には、広い教養がなければならぬという主張をカントがしているとみることができる。このカント的主張が現在の日本の大学では大綱化以降、制度としては失われてしまった点を考えると、カントがたびたび強調する「理性使用」のあり方を含め、興味深い問題でもあろう。⁽¹⁴⁾

3 大学と教養

周知のように哲学部あるいは教養学部の科目である自由学芸は古代ギリシアのピタゴラスやプラトンの学校、イソクラテスの修辞学にまでさかのぼるといわれているが、直接的には8世紀、カロリング朝時代のアルクイン (Alcuinus) が用いた科目分類によるようである。上級三科 (文法学、修辞学、論理学)、下級四科 (算術学、幾何学、音楽学、天文学) は、カントの議論とは異なり、実は、12世紀にかけて、神学部にとって重要な科目として認知されていた。⁽¹⁵⁾ 哲学部の教科を通してこそ、聖書の意味を深く理解できるというのである。特に、12世紀を中心に活躍したサン・ヴィクトル学派の一群には、自由学芸に対する深い洞察がみられる。例えば、有名なフーゴー (Hugo de Sancto Victore) は『ディダスカリコン』において、自由学芸の起源を古代ギリシアに結び付け、哲学を「学芸知の学芸知

であり、学問分野の学問分野」と規定し、すべての学芸知と学問分野は哲学に向かうとしている。¹⁷ ここには、イデア的認識や形相を神（の自然）と関連付ける狭義の哲学と、自由学芸（学芸知一般）としての広義の哲学との区別がみられるが、いずれにせよ、フーゴーによれば教養学部¹⁸の学芸知は有機的に結びついていた。例えば、天文学などの自然認識は内なる自然（神的類似）と関連付けられ、また、文法学は誤りなく語る学として、その正当性が保証される。フーゴーは、このほか新しい学問（医学や商学など）にその位置を与えたことでも有名であるが、パリを中心とした伝統的スタイルの大学では、哲学（部）は神学に対して表向きは下僕であっても、実態としてみれば、前節で触れたように大きな力を持っていたというべきであろう。

カントが憂えた哲学部のあり方は、上記のような事実からみると、ドイツ特有の現象であったと思われる点については、先に触れた。しかし、こうした状況はカント時代のすぐ後、フンボルトによって大きく転回する。

1810年、ナポレオン戦争を通じて政治・軍政・教育改革などを進めたフリードリッヒ・ヴィルヘルム3世の下、言語学・博物学で著名なF・フンボルトによりベルリンで最初の大学が設立された。これが現在のフンボルト大学ベルリンである（設立当初はフリードリッヒ・ヴィルヘルム大学）。初代学長にドイツ観念論のフイヒテ、¹⁸ 3代目学長にかのヘーゲルが就くなど、旧来の哲学部主導の大学としてスタートしている。もちろん、フンボルト大学は神学部、法学部、医学部という3学部を擁していたが、カントの理念を大幅に採用して、自然科学を含む教養教育を哲学が主導し、研究と教育を一体として考えるという新しいタイプの大学として、スタートしている。¹⁹ また、正教授のポストも他のドイツ内の大学に比べて多く、発足時で4つの学部で各々6名程度であった。²⁰

フンボルトはいわゆるドイツロマン主義の時代、つまりカントの晩年からドイツ観念論が一世を風靡する時代に生きた。これまでの大学は寄進者の多い大都市周辺部にしか設立されなかった点を踏まえ、そうした旧タイプのしがらみから離れた都市での大学設立を目指したとされ、また国家のために人間から宇宙にまで思いを馳せられる大教養人

の輩出を目指したとされる。⁽²²⁾ この教養人が国家のエリートとなるべきという発想は、専門家（神学、法学、医学）を政府の管理下に置くこれまでのドイツ型エリート教育とは大きく異なるようにみえるが、これは専門をないがしろにしてよいという意味ではもちろんない。シェリングは『学問論』（1802年）の中で「したがって、個々の専門のための特殊な教養の前に学問の有機的全体的認識が先立たなくてはならぬ」と述べ、個別の知識は全体の中で、とりわけ、シェリングがいう絶対者の理念の中で意味を持つとされる。こういう理念は事柄それだけを取り出せば極め高尚で理念的すぎると思われるかもしれない。またフイヒテは「哲学部学部長としての演説」の中なかで、アカデミックスな称号が学問的教養を通じて人間性を高貴にする偉大な学者同盟への受け入れを認めるシンボル、と述べながらも、こうした称号授与者に「無学な賤民がそれに対して何をいおうと、またその人たちがわれわれの学位に敬意を表そうと、あるいはそれを嘲笑しようと努めようと、事態に通じた人はそのことを問題にしないのであります」と述べている。フイヒテは、賤民状態からの脱出として学位を位置付けているが、これをカントの啓蒙の精神（未成年状態からの脱却）と比較すると、そこに社会に対する意識のズレをみて取れるだろう。

ヘーゲルがフンボルト大学着任後に執筆した『エンチクロペディー』『緒言』をみただけでも、そこに現れる哲学の捉え方は、完全に中世までのそれと異質である。「緒言」15、16節には、「哲学の各部分はそれぞれ一個の哲学の全体であり、それぞれ自己自身において自己を完結させている円環である」としながら、その各部分が一つの特殊諸学（の基礎概念）であり、哲学が諸学の全体から成立している。こうした学問観は、大学の組織図からみれば、哲学部が上級学部を経験的特殊科学として飲み込む形になっている。こうした学問観が記されたこのテキストが、フンボルト大学の学長になるヘーゲルによって講義資料として配布されたことを考えれば、諸学全般に通じたジェネラリストを教養教育を通じて育て上げることが、国家の教育としていかに重視されたか理解され得るであろう。

しかし、こうした知的エリートとしての矜持が過度に煽られ、結果、18世紀から19世紀の都市部の新興富裕層の成

立と、そうした富裕層が子弟をギムナジウムへ入学させ、その子弟が国家官僚となっていくという、新しい権力構図の成立をもたらすことになったことを忘れてはならない。阿部勤也によれば、教養型富裕層は、啓蒙の時代を経て、中世以来の教会型の権力構造は排したものの、国家主導の世俗権力の中で新しい世俗との対立という看板を新たに構築できなかったのである。⁽²⁶⁾しかし大学の一種のアジール権だけは、旧来の教会が持っていた権利とともに大学の自由・自治の下に残される。⁽²⁷⁾こうした教養市民層が、市民階級の二分化の要因となりナチスの台頭の要因の一つとなつたともいわれている。⁽²⁸⁾

ところで、フンボルト大学の新しい理念をドイツロマン主義やドイツ観念論に還元してしまうことは、事柄の半分しかみていないことになる。先にフンボルト大学がカントの理想を現実化したと論じたが、これは正確な表現ではない。むしろ18世紀以降のドイツの大学の近代化あるいは近代的大学の設立の総決算としてフンボルト大学が設置されたとみるべきだろう。ヴァイゲルが述べているように、「ハレ大学は、軍国主義とは別のプロイセンがあつたことを思い起こさせてくれる。プロイセン国家は、やがてケーニヒスベルクでカントをもつて頂点に達することになる啓蒙主義と、このハレ大学を通じて結びついたのだ」。⁽²⁹⁾

ハレ大学は1694年創設であり、フンボルト大学よりおよそ一世紀古い。この一世紀の間に、ゲッティンゲン、エアランゲン、ミュンスター、ブレスラウ、ボンなどに大学が設立されている。もちろん、30年戦争以降、開学に際して、プロテスタント領邦国家内にある大学はローマ教皇からの許可状は得られないが、時の神聖ローマ皇帝の許可状を得、プロイセン領にあつたことからフリードリッヒ3世の誕生日に開学式が行われた。⁽³⁰⁾そしてライプチヒ大学を追われたC・トマジウスが着任し、ドイツ語を大学の教授用語として初めて使用した。また1706年、C・ヴォルフがハレに招聘されたことは、哲学部にとって大きな意味を持つ。周知のように、ヴォルフは、ラテン語の著作のほか、ドイツ語で教科書を書き、その分野は、Weltweisheit（哲学のドイツ語訳語）という言葉が示すように、自然科

学から社会科学、形而上学まで、百科にわたった。このヴォルフのテキストが、これまでのテキストにとって代わり、哲学部での重要な資料となり、例えば、彼の弟子筋のパウムガルテンやマイヤーが、それをもとに形而上学、論理学のテキストを書いたことはよく知られている。加えてカントの『純粹理性批判』の構成は、ヴォルフの一般存在論と特殊存在論の区分に従ったこともよく知られている。ラテン語は当時、中世以来の「討論 Disputation」の公用語として機能はしていたが、この討論自体がハレを中心に行われなくなり、結果的に、ドイツ語の導入と相まって19世紀を迎えるころには大学現場から姿を消すことになった。

また、ハレ大学の正教授数は1760年において神学部6、法学部5、医学部8、哲学部20であり、1875年では、神学部7、法学部5、医学部11、哲学部19であった。⁽³¹⁾ 哲学と医学の正教授数が多い理由は、実は、ハレ大学がプロイセン政府の意向を汲んでいたためである。すなわち、宗教的寛容主義と対フランス（当時はルイ14世治下）の政治的・文化的対抗軸として、国家にとって優位な人材の育成という実学的な面がさらに強調され、それが啓蒙という自然科学的精神と同伴する形で、哲学部のポスト数を押し上げていたとみることができる。神学部のポストが増えないのは、世俗権力に教会が飲み込まれた様を象徴しているともいえる。またハレ大学から、哲学や法学の教育改革も始まったとされている。⁽³²⁾ つまり新しい知見が旧来のスコラ的、アリストテレス的知見を補完する形で講じられ、それが講座のあり方に対しても影響を与えてきたとされるのである。

もちろん、学部権威の序列が、カントも論じているように、神学、法学、医学、哲学、の順であったことは当時も揺るがず、教授が神学部へ移籍するための「こしかけ」として哲学部の講座が機能していたという側面もみられるが、⁽³³⁾ 実態として哲学部が国家の要請に沿う形で大学教育に携わっている以上、19世紀初頭のフンボルトの大学設立は、こうしたハレ大学の教育方針の多くが移植されたものとみえることは十分可能であろう。

4 日本の大学と哲学

さて、我が国における大学教育とそのシステムは、旧制高校と旧帝国大学の実例をみるまでもなく、明治維新政府がその国家モデルをプロイセンにみたことから十分推察されるように、ドイツ型教育システムの大きな影響下にあり、そこにフランス型エリート教育が融合する形態であった。⁽³⁵⁾ここでいわれる教養エリートとは、特に日本の場合、表面は金銭とか個人的欲望から自由であるいわゆる「人格者」を指し、それは、ヘーゲルが『精神現象学』や『エンチクロペデー』の中で「絶対知」、「絶対精神」として表現した、まさに世界のあり方を根底まで理解しうる教養ある哲学者を意味している。したがって、金銭の問題にあくせくと気をもむ吾人であってはならない。それは、社会的な身分からいえば、恵まれた富裕層である。明治後期、大正から昭和初期に、いわゆる「高等遊民」という言葉が使われ、夏目漱石や川端康成の小説にしばしば登場する人物像となった。旧帝国大学の文学部は哲・史・文から構成される教養の奥の院となり、古典・正典を伝授、解釈する神聖なる場所となる。⁽³⁶⁾そもそも戦前の帝国大学で文学部それ自体が存在したのは東京大学と京都大学のみであったから、この両者の文学部に進学した学生の中には、深く教養主義に傾倒し、中途より心ならず法学部や工学部へ行かざるを得ない者もいた。ただ、ドイツと異なり、設立当初から、圧倒的に文学部の学生の比率は少なく、早稲田大学（東京専門学校）や東洋大学（哲学館）などでも、1920年ころの卒業生の文学部生が占める割合は、全体の1割弱であった点を見ると、むしろ希少価値ゆえのエリートとしての矜持がそこで育てられたといえる。しかし決して就職率はよかったわけではなく、大学教員や中学校をはじめとする学校教員が主たる就職先であった。これは、先に述べた一定の富裕層の社会参加の装置として機能していたとみることもでき、⁽³⁸⁾現在、膨大な数に上る文学部系の学生が目指す動機とは決して同じとはいえない。「世間」を無視した理念実現の場が、学校教育現場であった。「医者・僧侶・教員」が、世間知らずの代名詞として揶揄され始める前提が

すでにここにあった。

こうした教養主義が大きく転換するのが、周知のように、先の大戦後の GHO の教育改革である。これにより米国の新しい大学システムが漸次導入される。フレックスナーは（彼のテキストは、アメリカの大学に対して辛辣すぎるという批判を受けているようだが）、アメリカの大学の三つの構成要素を「中等教育とカレッジ」、⁽³⁹⁾「大学院と専門職大学院」、「一般大衆のためのサービステーション」に分けている。このうち最初のカレッジ論において、フレックスナーは、アメリカの民主主義が、一種の知的エリートへと向かう選別に反対し、雑多（とフレックスナーはいう）な学生を、最初の二年間でレベルの高いハイスクールで行う教育を授ける必要性がある点を、コロンビア大学を例にとり論じている。むろん、アメリカにもイギリスをモデルとした有能な学生を集める公立、私立大学は存在する（ハーバード、プリンストン、スタンフォードなど）、しかしながら、全体として大衆化の路線を堅持している。⁽⁴⁰⁾こうした中で、1876年に設置された、ジョン・ホプキンス大学がむしろアメリカのこれまでの常識を覆す新しい研究重視と新しい学位授与の大学として、大きな転換を与えたことは（ハーバード大学やエール大学などに対して）、ヨーロッパの大学と比較するとき、その非対称性からみて興味深い。⁽⁴¹⁾

デューイが『哲学の改造』⁽⁴²⁾の中で、ヘーゲルの自由論が、結局、官僚的絶対主義にしか役立たなかったこと、また、教育を青年として成熟する過程としてしかみなさない啓蒙的教育観に反対するとき、そこには常に大衆の教育を、重要な社会的目的として考えている、大衆に対峙したアメリカ型大学の姿が読み取れる。付言すれば、このアメリカ型プラグマティズムには、古典を正典として保存していくことが最重要であるのではなく、常に未知の世界に開かれた人文学の姿がみえるだろう。ジョン・ホプキンス大学が科学の分野で大きな功績を果たしている点を考慮すれば、文学部と科学（それはもちろんヨーロッパ的には哲学部・教養学部の科目だが）との新しい関係が読み解ける。

5 日本の大学において哲学が果たす役割

日本の国立大学においては、平成16年（2004年）以降の法人化を機に、大学の組織的運営は大きく転換した。私立大学においても、国立大学の法人化が志願者の動向に大きな影響を与えると予測され、程度に差はあれ、これまでにない改革を求められている。最近では、2016年度からのいわゆる「障害者差別解消法」の施行や大学の「3ポリシー」の明示化の問題、そして、地方の大学や中堅偏差値以下の大学には喫緊の課題として迫る2018年問題（18歳人口の減少問題）が、大きな影を落とし始めている。こういう厳しい状況の中で、大学経営という極めて現実的な問題と向き合わねばならないとき、哲学する我々はどうした態度や対処を求められるのであろうか。エピクロス学派の格言よろしく「隠れて生きよ」とは、学生らの眼差しにさらされる公的機関に所属すること自体からみて、殆ど皮肉にしかならないだろう。

日本の大学の文学部は東大、京大を中心に戦前からの教養エリート型教育と戦後の新制大学、そして固有の創立理念を持った私立大学との間で、その組織や社会との向き合い方に大きなひらきがある。特に学園紛争以降、いわゆる教養型エリート主義が実態としては凋落し、現在は各大学が3つのポリシーの文言をめぐって大学の特色・ブランドを競おうとしている。

戦後、不幸なことに日本の大学は、この教養型エリート教育が、実態としては崩壊してしまったにも拘わらず、例えば、岩波書店という文化装置に支えられる形で、文学部の奥の院はいくつもの学術雑誌、講座シリーズや全集を公開し得た。また、人事においても生え抜き型人事を行ってきた大学院を擁する私立大学を一部含め、奥の院の大学はある種のアカデミックなヒエラルキーの下で、多くの地方の第二期以降の国立・公立大学へ送り込むシステムが確立していた。

しかし、21世紀に入るころから、文学部における博士課程認定が文科省の下で積極的になされるようになってきたことや、法人化以降の大学の切迫した経営状況、また、大学の大衆化に伴う教育力重視などで、奥の院出身者が必ずしもアカデミックポストに容易に就ける時代ではなくなった。文系、とりわけ哲学系においても「公募人事」が積極的に求められている。

現在、日本の大学には、スーパーグローバルの採用大学を軸に、大きな二極化がはかれようとしているようである。しかし大学の内部で仕事をしている教員の心持は大きく変わるものではない。例えば、旧帝国大学系で学んだ教員の中には、いわゆる、古典保持をアカデミズムの重要な仕事と位置づけ、教育や行政は余力に任せるという方もまだに散見される。私立大学の生え抜きの中には、臨時定員増以前の輝かしい時代の母校に思いを馳せすぎてしまう方もいるだろう。これが専門性を鼻にかける専門俗物に墮することも、⁴⁵ 昨今、ままだ。

特に、大衆化の中で、大学文学部への進学者層が、女子学生を中心に大きく変化し、バブル崩壊以降、文学部進学⁴⁶の学生の就職率は決して高い現状を考慮すれば、2017年現在、広義の哲学（教養学）と狭義の哲学の存在理由を問うことは、その理念や個人的思いとは裏腹に極めて難しい状況にある。東京大学や京都大学の哲学系の講座は、それでも、古典文化の保存、という観点からみて許容され続けるだろう。しかし、地方の国公立大学や私立大学は、すでに専門主義を超えた研究や教育、場合により、先のフレックスナーのアメリカ大学論のように高校との間のリメ⁴⁷ディアル教育にエネルギーを注がねばならない。

鷺田清一は、現在の状況下での哲学のあり方をいくつか提言している。現場という名の「臨床」と広い意味でのメタ科学でもある諸学のフレームとしての哲学について、である。⁴⁸ これには、一方で社会に開かれた大衆化の中での哲学であると同時に、学問論としての旧来の教養としての（この教養には世俗的意味も含む）哲学との微妙なバランスが必要である。ただ、昨今、一部の哲学の潮流の中には極めて専門的な領域が重んじられる傾向があるが、哲学が特

殊科学ではない以上、自分の特定の専門を持つスペシャリストとして研究すること、歴史的縦軸や諸学に広くひらかれた教養を持つことは矛盾しないのである。アカデミック内の組織論や大学において哲学がいかにあるべきか、という議論をこえて、ヌスバウムが述べているように個々の人間が世界市民としての自覚をもち、民主主義を機能させるという重要な使命を、哲学がソクラテス以来担っているという重要な点⁽⁴⁶⁾を、我々は決して忘却できないし、すべきではないのである。こうした点は、教養エリート教育に戻ることではないし、潜在的な身分制社会を抱えるヨーロッパと同じように哲学教育を古典の伝承に限ることでもない。確かに、日本の大学は国公立、私立を問わず、ステークホルダーとの関係において、また社会的には経済の余剰の中で、生（活）かされていることも事実だが、それでは、カントが憂えたように、哲学が専門職学部のための「下僕」という形でしか意味がないことになる。カント以降、ドイツの教養主義は、やや極端な方向へ進んでしまった。しかし現行の哲学教育が狭義の哲学（教養教育）の理念をけん引する役割を果たせるような組織再編も必要かもしれない。そもそも、日本の大学には哲学部という学部が歴史上存在したことがないことを考え併せれば、今日の哲学の研究スタイル（例えば特定の哲学者の研究や特殊な領域のプロパーに終始する）にも大きな変化が引き起こされるかもしれない。

おわりに―謝辞にかえて

私はいろいろ遠回りして2011年度に北海道大学大学院・文学研究科の博士課程へ進学し、カントを中心とした古典哲学の研究を3年間かけて行った。昨今は哲学研究のあり方にもいろいろあり、何がベストかをいえる立場にはない。ただ数理科学の先端の研究も幾分か続けているので、少しでも付け言したい。古典哲学研究はクラシック音楽の演奏解釈に共通する点があるのではないか。それは古典文化の伝承とともに新しい解釈で新しい音を奏でるのに似てい

る。むしろ古典テキストが正典であり、現代の思想がそれに比して劣っているとみなす、いわばアリストテレス『自然学』注解^{レクシ}をし続けるような態度には大きな問題がある。一方、科学基礎論には、やはり、理科系に刺激を与えうるだけの十分な基礎研究が欠かせない。最近、この作業がいささか欠けていて、業績数を急ぐあまり、少しジャーナリストイックになっている面もあるのではないだろうか。例えば数理科学の専門家に混じって当該のメタ科学（哲学）がどういう意味を持つかについてポリシーをもって論じないと、それは当該の科学からも信頼されないだろう。

2001年の春、博士課程の試験を受けるにあたり、新田孝彦先生の旧教養棟にある薄暗い研究室にお邪魔させていただいたときのこと、昨日のことのように思い出されます。当時は数学の修士論文執筆（冬、お金がなく暖房費をケチって、寒さの中の計算とTeXが大変だった記憶があります）と以前書いた哲学の修士論文の書き直しの作業、それから日課である塾のアルバイトで疲弊していましたが、新田先生に相談にのっていただき、博士課程に進んだ後も、就職に焦る私に対して「まず3年で博士論文書き上げなさい」と、優しくご指導いただきました。博士課程2年目には、学会発表など相当無理をお願いし、新田先生をはじめ、当時の哲学・倫理学講座の先生方や助手の皆様にご迷惑をおかけしました。新田先生にいろいろご指導いただきましたが、今でも印象に残っていることは二つあります。一つは、「きちんとした日本語を書く」ということ。私は筆が流れる悪い癖、文言が曖昧になる悪い癖、がありました。例えば「もの」や「こと」という単語を多用しないことや、文章の適切な長さ、など。今、私の教え子たちに指導している重要なことを、新田先生から学びました。二点目は、引用の正確さです。当たり前のことなのですが、テキストの読み方、そこからの解釈の仕方に飛躍がある点をズバリと指摘されたことがあり、論文を全面的に書きなおしたことが何度かあります。自分ではこの程度の飛躍は許されるかな、と思ってもダメでした。博士課程はプロの課程、そういう意識を持つことの大切さを教えていただきました。新田先生は、私が在籍中も様々な学内行政をされ

ていました、私が京都で働きはじめた後、しばらくして文学部の責任者となられ、さらに副学長となりました。極めてご多忙な毎日を過ごしてこられたと拝察されます。しかし学内行政は専任教員の極めて重要な仕事です。私も現勤務先で、文学部内の役職経験があるので、学内行政と研究・教育とのバランスのとり方やその難しさを幾分かはお察しできるつもりですが、副学長ともなれば、実務的な仕事がこの大学でも多いようです。本当に、精神的にも肉体的にもお疲れではなかったかと拝察されます。今後は、是非、ゆったりと、ご自分のお時間を持たれつつ、未熟な私を、叱咤・激励くだされば嬉しく思います。

私の研究室にアテネの土産店で買った割としっかりしたソクラテスの胸像があるのですが、時々、新田先生にみえるのです。

(1) 小方直幸「大学における職業準備教育の系譜と行方―コンピテンスモデルのインパクト」(『シリーズ 大学5 教育する大学―何が求められているのか』、岩波書店、2013年、所収)

(2) 伊藤彰浩「大学大衆化への過程―戦後日本における量的拡大と学生層の変容」(『シリーズ 大学2 大衆化する大学―学生の多様化をどうみるか』、岩波書店、2013年、に所収)

(3) 野家啓一「人文学に使命―スローサイエンスの行方」(『シリーズ 大学4 研究する大学―何のための知識か』、岩波書店、2013年、所収)

(4) H・ラシュドール(横尾壮英・訳)『大学の起源(上)―ヨーロッパ中世大学史』、東洋館出版社、1966年、32―33ページ。

(5) 横尾壮英『大学の誕生と変貌―ヨーロッパ大学史断章』、東信堂、1999年、7―8ページ。

- (6) ジャン・ヴェルジュ（大高順雄・訳）『中世の大学』、みすず書房、1979年、39～42ページ。
- (7) *unum*（一つ）と *verio*（方向）の合成語が *universitas* の起源とされる。一つの方角へ進む組織、つまり共同体（組合）が大学である。
- (8) 横尾壮英、前掲書、98ページ。
- (9) 同上、104ページ。
- (10) カント『諸学部の争い』、24ページ（角忍、竹山重光・訳）（『カント全集 18』、岩波書店、2002年、所収）。
- (11) 前掲書、26ページ。
- (12) 前掲書、31ページ。
- (13) カント『諸学部の争い』準備草稿、354～355ページ、（『カント全集 18』、岩波書店、2002年、所収）
- (14) カントが上級学部との争い、特に神学部との争いにおいて使う哲学における「理性使用」には、今日からみれば合理的・科学的の使用というニュアンスが強い。
- (15) ジャン・ヴェルジュ、前掲書、6ページ。あるいはアルクイヌス（アルクイン）『文法学』（山崎裕子・訳）（『中世思想原典集成 6 カロリング・ルネサンス』、平凡社、1992年、所収）、130ページ。
- (16) サン＝ヴィクトルのフーゴー『ディダスカリコン（学習論）——読解の研究について』（五百旗頭博治・訳）（『中世思想原典集成 9 サン＝ヴィクトル学派』、平凡社、1996年、所収）、35～36ページ。
- (17) 前掲書、52～53ページ。
- (18) ヘルベルト・シュネーデルバッハ（舟山俊昭他・訳）『ドイツ哲学史 1831～1933』、法政大学出版、30～31ページ。
- (19) このことはドイツの大学史からみて画期的なものであり、それは先に本文中で論じた「学部」のあり方と関連する。日本の大学制度、特に旧帝国大学がドイツ、プロイセン型をモデルとした面もあるから、この点は見逃せない。
- (20) シュネーデルバッハ、前掲書、34～37ページ。
- (21) 横尾壮英、前掲書、86ページ。この数は、決して多いとはいえないが、フンボルト大学は教授数の最も多い例である。

- (22) 阿部勤也『大学論』、日本エディタースクール出版部、1999年、17ページ。
- (23) シェリング『学問論』（勝田守一・訳）、岩波文庫、1957年、13ページ。
- (24) フィヒテ「哲学部長としてのフィヒテの演説（1811年）」（『フィヒテ全集 22』、哲書房、1998年、所収）402～403ページ。
- (25) ヘーゲル（榎山欽四郎他・訳）『エンチュクロペディー』（『世界の大思想 15』、河出書房新社、1974年）。
- (26) 阿部勤也、前掲書、21～26ページ。
- (27) 阿部勤也によれば、日本の神社は近代以降このアジールとしての機能を消滅させてしまったため、大学が唯一残された領域となった。それが大学紛争などを劇化させた要因ともいえるが、昨今の国と大学の関係あるいは、学部自治問題は、大学のこのアジールとしての役目の終焉を象徴しているともいえそうである（前掲の注のテキスト参照）。
- (28) シュネーデルバッハ、前掲書、41～44ページ。
- (29) エンゲルハルト・ヴァイゲル（三島憲一、宮田敦子・訳）『啓蒙の都市周遊』、岩波書店、1997年、61～62ページ。
- (30) 別府昭郎『近代大学の揺籃 十八世紀ドイツ大学史研究』、知泉書院、2014年、24ページ。
- (31) 別所昭郎、前掲書、31ページ。
- (32) 例えばC・クルージウスにも影響を与えたとされるF・ホフマンは実験哲学や医学の講座をもっていた。
- (33) 別所昭郎、前掲書、26～27ページ。
- (34) 別所昭郎、前掲書、47ページ。
- (35) 本論では詳細は触れられないが、ナポレオン治世化の教育改革（エコール・ノルマルやエコール・ポリテクニク）に代表される高等師範学校、高等工学系学校は、日本の富国強兵政策と国家による国民階教育のための教員養成モデルとなる。
- (36) 竹内洋『教養主義の没落 変わりゆくエリート学生文化』、中公新書、2003年、86ページ。
- (37) 竹内洋、前掲書、88～89ページ。
- (38) 阿部勤也『「教養」とは何か』、講談社現代新書、1997年、98～99ページ。

- (39) エイブラハム・フレックスナー（坂本辰朗他・訳）『大学論』、玉川大学出版部、2005年、68ページ。
- (40) 1636年のハーバード大学創設以来、数多くのカレッジが設けられ体裁は整っていたが、教養ある市民、専門職人養成がアメリカの大学の主眼とされていた。横尾壮英、『大学の誕生と変貌』、238ページ。
- (41) 横尾、前掲書、247～248ページ。
- (42) ジョン・デューイ（清水幾太郎他・訳）『哲学の改造』、岩波文庫、1968年。
- (43) 竹内洋、前掲書、4章、参照。
- (44) 佐々木力『学問論 ポストモダンイズムに抗して』、東京大学出版会、1997年、18～22ページ。
- (45) 鷺田精一『哲学の使い方』岩波新書、2014年、参照。
- (46) アーサー・C・ヌスバウム（小沢自然他・訳）『経済成長がすべてか？デモクラシーが人文学必要とする理由』、岩波書店、2013年。
- (47) 古典テキストの正しい校正という意味ではない。アリストテレス以降の学者の多くが、アリストテレスの記述を正典化し、そのパラダイムから向け出られないことを意味する。こうしたことは一笑に付されない。哲学の古典を扱うとき、当該哲学者に拘泥するあまり、我々も時に陥ってしまう態度である。